

サー・フリリップ・シドニー作

『アーケイディア』牧歌集（抄）

和訳・注解

村里 好俊

一 デルポイの託宣¹

お前の年上の心配は お前の心配性の顔から
王子の手段で盗まれるが 失われることはない
お前の年下の心配は 自然の至福に恵まれて

1 番号は、底本とした William Ringler ed. *The Poems of Sir Philip Sidney*. Oxford: Clarendon Press, 1960 に拠る。 Katherine Duncan-Jones ed. *Sir Philip Sidney: Selected Poems*. Oxford: Clarendon Press, 1973. Katherine Duncan-Jones ed. *The Oxford Authors: Sir Philip Sidney*. Oxford Univ. Press, 1989. Jean Robertson ed. *Sir Philip Sidney: The Countess of Pembroke's Arcadia (The Old Arcadia)*. Oxford: Clarendon Press, 1973 も参照し、各書の序論・注解等には助けられた。

異様な愛を掻き抱く 自然がいつとう忌み嫌う愛を

二人ともに かような二人と結ばれるが

被告席で お前の枢に 哀訴する

何故に 生きているお前を 死なせたかを

お前の玉座に 異国の政権が就く

これらの打撃が お前の頭にあたる前に

お前は 妻と姦淫の罪を犯す

お前は 妻と姦淫の罪を犯す

王位に就くは異国人²

これみな当る運命^{さだめ}の年なり²

2 アルカディアの大公バシリオスは自らの将来についてデルファイ神殿に伺いを立て、この歌を告知される。この託宣は、謎めいた形で次に続く物語のプロットを要約した内容である。託宣に告げられた不幸な事態を避けるため、バシリオスは政務を摂政フィラナックスに預け、自らは妻キネキア、二人の娘バメラ、フィロクレアと共に田舎へ隠居するが、結局はここに予言されたすべての事柄が実現することになる。

物語の粗筋に即したこの歌の内容は、以下の通りである。
マケドニアのユアルカス王の嫡男ビュロクレスと、その従兄でテッサリアの大公ムシドロスは、アルカディアの二人の王女が森の中に隠居して住んでいるとの噂を聞き付け、二人に近づくため、それぞれアマゾン女戦士

クレオフィラ（「ニュー・アーケイディア」ではゼルメイーン）と羊飼ドロ
スとして変装する。

紆余曲折の後、バシリオスの長女パメラ姫は、王子であることが判明し
たムシドロと駆け落ちし、テッサリアへ向かう（アルカイディアの人々は、
姫がかどわかされたと考え）が、やがて途中の夜の森の中で盗賊たちに
急襲され、御褒美目当てで元の住処へと連れ戻される。「二・二行」。次女
フィロクレア姫は女装したピュロクレスを恋人として受け入れ、同衾する
「三・四行」。バシリオスとその妻ギネキアは女装したピュロクレスを、前
者は本当の女と思ひ込み、後者は美しい若者と見破って、それぞれ恋に落
ちる。ピュロクレスは一計を案じて、同じ夜、同じ場所二人と逢ひ引き
の約束をする。バシリオスは、ピュロクレスに誘われて、彼が寝泊まりし
ている洞窟の暗闇の中で、同じく彼に誘われたギネキアと同衾し、妻をピ
ュロクレスと勘違いして姦淫の罪を犯す。「〇行」。喉が渴いたバシリオ
スは、ギネキアが持つて来ていた恋の媚薬を無害と思つて飲み干し、強壯
剤が利きすぎて気絶し、一見死んだようになる。「六・七行」。この時、近
隣の小アジア諸国を従えたマケドニアのユアルカス王がたまたまアルカデ
イアに到来し、国王代理職として裁きを引き受け「八行」、バシリオス殺
害のことでギネキアを生き埋め刑に、王女たちへの暴行の罪で、（初めは
わが子、わが甥と知らずして）二人の王子たちを断罪する。しかしながら、
結局は、有罪判決が実行に移される前に、死んだと思われていたバシリオ
スが息を吹き返し、皆の者が許される。これらすべての出来事が一年のう
ちに起る。

この託宣は『オールド・アーケイディア』では物語の冒頭に置かれてい
るが『ニュー・アーケイディア』では第二巻の最後まで明らかにされない。
五・七行は『オールド』推敲のときに書き加えられたもので、シドニーが「抱
いていたことが知られる。なぜなら、ピュロクレスとは異なる構想を抱
いていたことが知られる。なぜなら、ピュロクレスとムシドロは裁判の
前に二人の王女と結婚しており、裁判における主たる係争点は王女たちへ
の暴力ではなく、バシリオスの殺害の責任を云々することになるからだ。

三 アレテスのモプサを称える反対讃歌³

いかなる長さの韻律を以てすれば麗しきモプサの徳を表す
ことが出来ようか。

モプサの徳は奇妙きてれつ、その美しさには想像の翼も駆
け昇れぬ。

かくも厳しき重荷を背負い、我が歌神^{ミューシ}、歌う務めを逃れら
れまい。

神々の御加護を！ されば貴重なモノに例えて彼女の姿を

3 ¹“koumētharon”（女性の美の品々ではなく、醜さをカタログ形式で歌
い上げる技法）の伝統に与するこの歌の中で、モプサに付与された神々の
属性は、実際とは正反対のもので、その点を読み取るのがこの詩を読む妙
味となる。つまり、サテュルス又は鉛みたいな土色で、老齢のために腰が
曲がっている。ヴェヌスは淫乱で売笑婦の保護者、パーン神は毛むくじや
ら、ジュノーは権高で口喧しい、虹イーリスは変化しやすく、キュービ
ッドは盲目で、ヴァルカンは足が不自由、モモスは神々の中にあつて下卑
た道化者というのが本当の属性なのである。因みに、「ジャシンス」は赤
みがかったオレンジ色、「パール」は眼の水晶体の上のくすんだ白い混濁部
「カエル石」は蛙の頭の中に出て来ると信じられ、中央に緑の眼を持つ白色
あるいは、褐色から黒色の宝石で、金の腕輪などに嵌め込まれたりした。「原
石の銀」は黒色で斑に銀の斑点があり、ざらざらした手触りである。この
反ペトラルカ的技法は、例えば、シェイクスピア『ソネット詩集』一三〇
番「ぼくの恋人の眼は、少しも太陽のようではない。／彼女の唇の赤らみ
は、珊瑚に比べるべくもない」に通じている。

形容できるに相違ない。

偉大なる神サテュルヌスのごとく純白、麗しのヴェヌスの

ごとく貞節。

牧神パーンのごとく滑らかな肌、ジュエノのごとく温厚、

虹の女神イリスのごとく不動。

キューピッドと共に予知し、鍛冶神ヴァルカンの歩きつぶり。
り。

これらすべての贈物を試食する為に、モモスのお上品を借用する。

彼女の額はジャシンス、頬はオパール色。

きらめく目はパールで飾られ、唇はサファイアのように薄

青い。

髪はカエル石のよう、その口は、Oの形に、大空のように

大きく開く。

彼女の肌は磨いた金、手は原石の銀のよう。

見えないあそこは隠しておくのが一番だ。

とくと信じ込み、決して残りの部分を捜し求めぬ者に幸

あれ。

七 羊飼ラロスとドロスの歌競べ⁴

「ラロス」いざ、ドロス、いざ、歌で悲しみを表わせ。
慣れぬことと、恥ずかしいなら

まさにその恥に、愛の位階の高さで威厳を与えよ。

愛の令名高かりし所、どんな流儀も卑しいとは思われぬ。

人の耳が吸い上げるは、真の愛の撒く言葉。

奇抜な着想の文句より、飾らぬ言葉が上々の出来栄え。

4 この歌比べは、第一牧歌の二番目に出る歌である。アルカディアの羊飼の中で一二を争う歌い手ラロスが故あって羊飼ドロスに変装したマケドニアの王子ムシドロスに歌比べを挑む。歌比べの例は古典的牧歌（例えば、テオクリトスやウエルギリウスの牧歌）に見られるが、シドニーが直接手本としたのは、恐らく、サンナザイロ『アルカディア』やモンテマヨール『ディアナ』であろう。競技の方法は、一方の歌い手が新鮮で、より厄介至極な詩形を導入し、他方の歌い手がそれを受け継がなければならぬ。実際、シドニーが用いた詩形は、サンナザイロやモンテマヨールのそれよりさらに厄介至極で、ラロスは最初三行連句の弱強体で、a・b・a・b・c・b・c・d・cと押韻するテルツァ・リーマ（三韻句法）で始めるが、やがてドロスに負かされて、それを断念し、七二行目からは二行連句に変えてしまう。しかし、その妙味は翻訳では如何ともし難い。

「ドロス」夜鳴鶯は滅多に鳴かぬ、鵲はお喋りばかり。

薪は完全に燃える前が、一番騒がしい。

致命傷は心の血を流し、掠り傷は膿む。

名狩人にえり抜かれた獣が、群れを成すのは稀なこと。

浅瀬はさらさらと音を立て、深い川は静かに流れ行く。

愛する人を想う真の恋人は、他人とは交わらぬ。

「ラロス」人目が嫌なら、顔を隠せ。

仲間外れになりたくなければ、わしらの流儀にならえ。

他人の祝宴にしかめ面をする奴は、離れて暮らすがまし。

し。

愛する女がいるのなら、恋の情熱を傾けて

挑戦を受けるがいい、女の完璧さを披露して

わしらの何れが、同情を受けるにふさわしいか。

「ドロス」君の挑戦は手強いが、こちらの守備は上を行

く。

いざ歌って見届けよ、（恋の炎を焚き付けられた）

私の病に比べたら、健康な君はあまりに貧相な競争者に

過ぎぬと。

いや、天が挙って私の高き企てを責めようと

高邁なのだ、私の企ては。おお詩神よ、語り伝えたまえ

あの方への讃歌を。詩神の筆に操られるまま、あの方を

称え奉らん。

「ラロス」詩神よ、口を噤むのだ。我が神パーンよ、カラ

の授かり物に

榮譽を与えたまえ。カラに満ちるはありとある善き天

性。

おおパーンよ、御笛にて助けたまえ、わしの歌が拙くと

も。

カラは甘美の山、何一つ欠けたるものなし。

蜜蜂ではなくとも、蜜で一杯。

薔薇の鋤で耕した百合畑。

子羊のごとく柔和、兔にまさる愛らしさ。

その眼はわしの視線を釘付けにし、その話は
守銭奴にとつての錢にまさる嬉しき。

その考えの何と慎ましく控え目なこと。

触ろうとすれば困った顔、話す言葉はすべて吟味の末。
言葉を改めて譬えてみれば、えもいわれぬニンフだ。

「下ロス」カラはそんな人。だが、ああ、その御名を口に
するだけで

傲慢不遜の極みとなる御方にあつて、私の想いが高めら

れればよいが。

あの方の称号にふさわしいようにと、持てる力の一切が

喜び勇むゆえ。

おお幸福な神々よ、あなた方は美しい肉体を占拠した

あの方の魂を天に受け入れて享樂され

玉座を奪われるのを恐れ、繋いでお離しにならぬ。

しばしば涙雨を降らし、大空が告白するには

天上人ら、完璧なあの方を見て陶然とし

天の御座を離れ、あの方の天へ踏み迷つたと。

されば、どんな世が最善の事物を結び合わせても

あの方をなぞることができようか。君の意中の娘を譬え

で飾るがいい。

あの方こそ最善の事物を集めた見本。

「ラロス」わしの恋を初めて目にした時、「倅よ、やめ

ろ」と、

親爺は歎き、何度大声を張り上げたことか。何度繰り返

したことか

「お前などキューピッドの砦が攻められる兵隊じゃねえ。

倅や、わしの長い苦勞の産物、この羊の番をせい。

お前の物をすっかり可愛がるのだ。羊毛の白さはすべて

に勝ると見える。

そんな富を支払ってくれる長生きの恋など見たことない

ぞ。」

息を切らして親爺は言ったが、カラが美しい肢体を鏡に

して

わしの視線をすっかり搦め捕るその時、わしは確信する

あの娘は不潔な羊どころか、気高い王冠にも勝ると。

その金髪をわしの物にしたら、貧乏なんかくそくらえだ。

その白い肌がわしの眼を飾るなら、白い毛に不足があるものか。

あの娘を手に入れるまで、羊の番をするのに慣れろだ
と。

「ドロス」あの方への恋が私の心を甲冑とし纏っているの
を見て、

幾たび理性は叫んだことか、「おお虚栄だ

こんな卑しい鋼鉄に真珠の飾りを付けるとは。

己れを見よ。人の手の届かぬ所に手を出すな。

あの方の御心、眩しい御姿、御身分はお前の弱い翼から

5 「ニュー・アーケイディア」でパメラ姫の徽章は「黒い角に極めて高価なダイヤモンドが嵌められた」図案で、その標語は「それでもなお私自身」であり、父に課せられた粗末な衣装の中でも彼女の誠実な高貴さが輝くことを指しているが、ここで、ドロスが思い描くイメージは、その名前を出さずとも、やはりパメラ姫のそれであり、彼女への一途な愛を隠そうとしている。

遠く隔てられている。

恋する者を傷つける恋は不人情なしわざ。」

こう理性は言った。しかしあの方が見えたと、理性は消えた。

あの方の瞳は私を支配し、理性のそんな反対など

長い空腹にあえぐ想いを満たす糧を台無しにするのみと
思われた。

あの方の比類ない至高は私の心を引上げて

高々と直立させる。希望が叶わず、生きる欲びが終ろう
と

これ以上の綺麗な死を、どうしたら選べようか。

「ラロス」一度、待ち甲斐あって、わしの眼は、わしの大

切な宝物が

袖をまくり、髪を結えず、胸を広げて

父御の穀物を（美しい手足を動かして）測るのを目撃し
た。

「おお」わしは叫んだ、「そんな卑しい仕事は放っておき

なさい。

測つておくれ、わしの恋病を。美しいお前が

悲しみの種を一杯注ぎ、わしの心ははち切れそう。

父御は大事に扱えとお前に命令し、こぼすと言つては叱る。

それならわしの魂を大事にし、高く募つたわしの想いを

こぼしてくるな。

殺して絶讃を博したためしなどないからな。」

この大胆な言葉をあの娘が聞いて、わしはこんな実を収

穫した

流し目だけでも幸せなのに、あの娘と来たら

にこりと笑みを浮かべ、さつと飛ぶ様に行つてしまつた

のさ。

「ドロス」一度、おお甘き一度限り私が見たのは、畏れ多

い

あの方が恐怖に押しひしがれた御姿。ひれ伏して

長々と大地を愛の晴着で包み着飾られた。

高価なあの方が倒れるのを眼にして、私は叫び始めた

「死せる大地にかくも高価な覆いの楽しみを与えす

あなたのために死にそうなる私の魂をこそ覆い飾りたま

え。

恐怖心はすべてあなたを氣遣う愛する者に委ねたまえ。

私たち二人の命を守るため、輝く瞳を私に注ぎたまえ。

されば私はあなたの瞳を、あなたは御自身を回復しま

す。」

私が叫んで得た報酬は、ぱつと輝く目線。

だがたちまち惨い名誉に召喚されて、視線は飛び去つ

6 『オールド・アーケイテイア』第一巻の終わりに、パメラ姫とフィロクレア姫は熊と獅子とにそれぞれ追われる場面がある。「・・・同じ森の中から身の毛のよだつ恐ろしい熊が現れて、私が隠れている場所の方へ猛然と突っ込んで来た。私はそれがあの獣には最善の避難法と聞いていたので、うつ伏せにひれ伏した。」

た。

名誉とは、手柄を無視する原因。

「ラロス」こうして楽しみのため作られたこの乙女、お

バーンよ、

彼女を哀れみたまえ。愛を知らずして愛の歳月を過す身を。
を。

こんな美しい野原は持主があつてこそお似合い。

魔法を使って頑なな心を動かせるのなら

教えたまえ、どんな円を作ればあの娘の霊に通じ⁷

わしのために愛の魔力を体験させられるのか。

その円はあの娘を一回りするわしの視線。

祈り求める力は、あの娘の瞳に宿る。

唱える呪文は、あの娘が昼も夜もわしに取り憑くべきこと。
と。

7 黒魔術、白魔術において、霊魂を召喚するための魔法の円を作る手順に言及している。

「ドロス」おお詩神よ、私の悲しみがなめるのは全く別の

悩み。

いくら心を傾けようと、私は言わずにおれぬ

あの方の内なる心の一点、何を以ても改められぬと。

ならば、どんな円がかくも稀なる大力を支配しようか。

あの方の精霊は一切の精霊を略奪し、立ち上げ、地獄に
落とし、また救う。

呪文では縛れぬあの方、人を制する御力は見事なもの。

捉えるや、私の魂をその奴隷に

私の視線を縛り紐に、私の想いを宿命の結び目になさ
る。

心を奴隷にされた者に勝る奴隷はいない。

「ラロス」カラよ、延び延びのわしのくじを、意を決して

引いてくれ。

美男ではないが、侮蔑の眼を向けなくてくれ。

何百頭もの羊の継承者は

陽には焼けず、嵐にも引つ繰り返らぬ

美しいものを飼っている、美はしばしば富の下僕しもべ。

わしの健康は、一切お前の善意に委ねよう。

好意をわしに寄せてくれるなら（お前寄せてくれ）

お前が眼にするわしは今のまま、ずっと今のままだし

誠実で優しいままだ。わしの羊でお前の糧を

羊の毛でお前の服を作り、花咲く野辺で

歌唄い、一日が始まれば

二人で二〇の罫を使つて小鳥を捕え

自然が万物を作つたように、楽しみ事を編み出そう。

しかし天人花の枝の蔭で落ち合う時は

愛神に許してもらつて、わしらの欲びを豊かにしよう。

その想いは世の不浄の財一切を凌ぐ。

「下ロス」他ならぬ姫君、あえてその名は言うまい

そんな価値ある御方には、肩書きなどただの染み。

私の心の土牢から生まれ出る嘆きを聞きたまえ。

最も気高い人でさえ、他人の苦悩を退けはしない。

お見せする富とてないが、私の富は君に他ならず

私の美の容色は君の放つ光線、私の健康は君の行為

私の心が纏うお仕着せは君の美徳。

私の糧は流す涙、口ずさむ調べは哀歌を生む。

絶望が私の野原、花花は精霊の戦い。

始まる一日は新たな憂慮、私の罫は日ごと君を見る視線

一敗地に塗れた私の想いは、小鳥となつてその中に留ま

る。

楽しみ事はなく、倒れた私の上を時が過ぎゆく。

自然は万物を作つたが、悲哀からこの私を作りぬ。

木蔭さえなく、見えるは私の太陽が燃える所のみ。

引き返す場所とて見当らぬ。外も内も油照り。

生きて死んでいる者を生かすも殺すも手立てなし。

「ラロス」だがこれほど理屈尽くめのこの求婚を

愛するカラが断るとなれば

多くを見過ぎたわしの眼など鳥がつつき出すといい。

あの娘が恋の掟をずっと憎むなら

この土の体は涙水に溶けて消える。

「ドロス」この土の体は涙水で溶けて消え⁸

涙水はさらに形を変えて

嘆息の嵐となり、嘆息は心の火と化し

火は燃えて灰となる。

こうして私の命は内より燃え尽きる。

「ラロス」こうしてわしの命は内より燃え尽きて

わしは獣のようになってい

わしより力弱いものを操るはみを口にくわえ

じつと耐えねばならぬ獣に。

昔は豊かだったわしの命も今はこんな重荷を背負う。

「ドロス」昔は豊かだった私の命も今はこんな重荷を背負

い

この私は幻となる。

8 ここからドロスが牽引して、相手の連の最後の行を自らの連の最初に置いて歌い出す趣向となる。

その存在は他の人の頭の中にあり

空想の眼で見えて露命を繋ぐ。

おお、自己分裂した男の惨めな様よ！

「ラロス」おお、自己分裂した男の惨めな様よ！

おお、よくぞ申した！キューピッドの深い切り込みを

お前の舌は身に染みて宣言した。

だが枯れた声ではこの職務は勤まらぬ。

他の衆も恋の有様を伝えたくてうずうず。

歌唱の名声はお前のものとなった。

「ドロス」歌唱の名声は君のものだ

我がラロス。君の才能には降参だ。

私の心は別の御方の評価を求める。

しかしああ、詩神よ、願わくばお力を奮われ

創意工夫で私の女神の心を動かし

気高さ輝くあの瞳が私に注がれますように。

見られても気づかれず、聞かれても注目を引かぬこの私

に。

八 羊飼デイコスのキューピッド戯画歌。

才なき絵かきは、学なき詩人とぐるになり

奇天烈空虚なまやかして、この世をば埋め尽くそうとする

一方が材料を提供し、他方が貨幣を偽造すれば

しかして見かけ倒しの、虚偽の偶像が出来上がる。

かく絵かきは描き、かく詩人は歌う

裸の、盲の、若い、二本の矢を持った神を。

いつも光から逃げる奴が、神だつてえ

奴の裸は、不誠実をごまかす仮面

9 『オールド』の第一牧歌では、この歌はアルカディアの羊飼デイコスに帰せられているが、『ニュー』では、ダメタスの妻ミノが「善き老婆」からの聞き伝えとして語る。キューピッドが首吊り役人に擬えられるのは、当時の諺「結婚と首吊りは宿命である」に見られるように、庶民的な連想による。当時の寓意画集にも、キューピッドが首吊り役人と結び付けられている絵がある。

盲ならば、どうして一寸たりと狙い違わぬのか

老フォイボスの若さを飼い馴らす奴がどうして若いのか

矢は二本、それぞれ金と鉛の矢尻付き

呪わしいのは、角の矢尻の三本目¹¹。

いや、断じて違う。老獺な悪党だ、彼奴は

百眼のアルゴスを父とし、雌牛のイオから生まれた、

イオに夫を奪われまいと、口惜しくてユーノーが

アルゴスに、彼女の世話一切を任せたととき。

マーキュリーが仕返しに、この不実な父を殺し

10 太陽神アポロンの別称。

11 妻に浮気された夫の額には角が生えるとする伝承に言及している。

12 百眼の巨人。ユーノー（ヘラ）に命じられて雌牛に変身した美女イオの番をし、ユピテル（ゼウス）が彼女に近づかないように見張っていたが、ユピテルの命を受けたマーキュリー（ヘルメス）の笛に眠らされて殺された。ユーノーは死体から取った彼の眼を彼女が愛玩する孔雀の尾に着けたという。

13 アルゴスの川の神、イナコスの娘。アルゴスの王女、且つヘラ神殿の女祭司。ゼウスが妻ヘラの妬みを恐れて若い白色の雌牛に変えた女。アルゴスから解放された後も、ヘラの送ったアプに追われてボスポラスを越えてイオニア海を渡り、世界中を放浪の末、エジプトで人間の姿に戻され、息子エバフォスを産み、エジプト人にイシスと呼ばれる女神として崇められたという。

獣の母は、獣の行為を許された。

父の惨殺、母の汚辱

ユピテルの、恋敵の種への侮蔑

悪いことが重なって、ルンペンに成り下がった惨めな奴は

悲惨な境遇が産み出す、すべての罪悪を覚えた

嘘、窃盗、間諜、告発

何一つ取り得なく、他人を互いに誑かす。

肌身離さず持ち運びしは、両親からの堂々たる授かり物

角生えし額、割れた蹄、千の目玉

凝視する目玉あり、ずる賢い奸計を隠し閉じた目玉あり

長く大きい耳には、届かぬ噂は一つもない。

角生えし額は、天を蔑み

割れた蹄は、きちんと大地が踏めぬ。

半ば人間のこの男、手っ取り早く人を誑かすいで立ちで
日ごと、人間世界に出没する。

半ば獣のこの男、獣の悪徳をしこたま植え付ける
その忠告を受け入れる、弱い心の持ち主に。

始終真つ新たな色服でめかし込み、至る所をうろついて

甲の悪を吸っては、乙に悪を汚染する。

狹隘吝嗇の胸には、儲け話を豪勢にとっさり持ち込み

驕った心には、栄誉の炎に眩しく光り輝き

開いた眼には、美しい品々を雨霰と降らし

欲望の甘い囁きを携えて、一人一人に忍び寄る。

だが、愛神の欲望は眼をこそ支配するがゆえに¹⁴

眼の中に彼の名が刻まれ、最高の功績が宿る。

この老いばれ白痴たわのキューピッド、生きながらえ幾百万年

惨めな放浪を重ねるたびに、ますますずる賢くなってい

く。

14 ちなみに、Kathrine Duncan-Jones ed., *Sir Philip Sidney*, "Oxford Authors", Oxford Univ. Press, 1989, p. 50 では「眼を支配する愛神の最悪のものなす」¹⁴とありつゝる。

仕方がなくて、ユピテル様が役目を仰せ付ける

(アルゴスにぞつこん惚れていた、ユーノーの懇願を聞き

入れて)

この人間世界にて、絞首刑執行人となり

眼に映るものは何でも欲しがる愚か者をみんな吊るせ、

と。

一三 ドロスとクレオフィラの応答歌¹⁵

「ドロス」御麗人、牧人の集いに荣誉を与えんと天が蔽つ
ていた御方が

甘美な御声を荒野の鄙びた詩神の声に組み合わせられれば
この地で十分に分かるのは、愛の働きの摩訶不思議。

15 一行六詩脚から成る詩行で書かれたこの対話詩は、『オールド』第一
牧歌集の最後に現れる(「ニユー」には出てこない)。羊飼ドロス(ムシド
ロス王子)とアマゾン女戦士クレオフィラ(ビュロクレス王子)に変装し
た二人は、まだ愛する姫君たちに受け入れられていない各自の愛の状況を
隠匿し歌に乗せて語り合う。

恋する者が宮殿へ馬で乗り付け、はたまた森の際へ走る

様。

愛は王侯を敬わず、乞食を哀れまず

(円の中心の一点に似て) いつも間近にいて

皆を教訓へと引き寄せる、丘や洞窟とて愛を退けられぬ。

「クレオフィラ」立派な羊飼さん、歌を歌えば支援の凡て
を独り占め

聖なる詩神に幾分か私の悩みを打明けて。

聖なる詩神、お一人で九人皆の徳を併せ持つ御方に。

だが、おお、幸いかな、あなたは。堂々とした糸杉や

快い銀梅花の木蔭で、フォイボスの猛烈な

陽の照り返しを免れて、不遇なエコー¹⁶にこの森で

とある女神の高き令名を轟かす術を授けられるあなたは。

16 空気と土との間に生れた森の精。お喋りだったためヘラの怒りを貰
い、他人の言葉を繰り返すだけで、自分からは何も話しかけることが出来
なくされてしまった。ナルキッソスに恋慕したが胸の思いを伝えることが
出来ないために顧みられず、悲しみのため身は痩せ細って、ついには声だ
けの存在になったと言われる。

幸いかな、あなたは。あなたのただ一つの理想のアイデアな
る聖人に向かい

粗末な装いではあれ、男らしい情愛を口にできるあなたは。
は。

幸いかな、その不幸。正しい釣合いを失わず

耳に正しく音伝え、正しい判断を仰げる不幸は。

だが、惨めかな、魂は。姿を変えてヴェールに包み

愛すれば愛するほどに、その愛を信じてもらえぬ魂は。

診断を間違った病の痛み、どんな仁術が役に立ちましょ
う。

自らの言い分を申し立てできぬ者に、正義の裁きが何の益
になりましょう。

あなたは恐くてどきまぎするが、必ず希望は叶いそう。

私たちは自然に手向かう謀叛人のごとく、虚しい求愛に阿

呆のよう。

だが、聞いてもらえず、咎められ、住もうと求める所から

遠ざけられ

呆然自失の態で彷徨いて、生れしかの地から追放され

嗚呼、一体、失いし物を取り戻す希望の持てるどんな手段
があるの。

苦悩に安らぎを与える希望の持てるどんな場所が残ってい
るの。

天はどうかしら。私たちの翼は短じか過ぎ、大地は私たち
を重荷と思う。

風は、溜息で増すばかり。火はどうかしら。火に事欠くこ
とはない。

外側の火の熱は涙が消してくれようが、内側の火となれば
いかな水でも冷やせない。その火ではネプチューン¹⁷の御座

も干上がる。

幸せな羊飼さん、神様にお礼を申し、いつも有難たいと思

いなさい

叡知を回してあなたを高い御座にすえるため低められたの
だから。

17 クロノスとレアの息子で、ゼウスに次ぐ威厳に輝く海神。ギリシア神話では、自在に大波を起こしたり静めたりする三股の矛を持つポセイドン。

「下ロス」神々様に誠心誠意、御礼を表する次第、
叡知を廻して私を高い御座にすえようと低められたのです
から。

それにしても、嗚呼！ それにしても、我らが定めは厳し
い定め

この上なく相応しい名誉を得るに、蔑みの心を懐かねばな
らぬとは。

牧人が嘆くは当然のことながら、彼の悲嘆は顧みてもらえ
ぬ。

邪気のない羊飼の下手な麦笛は、その耳ざわりな音が苦惱
を表そうと、

麗しの傍観者には、情熱ならぬ気晴らしと映る。

森や小川に向かいつつ、堪える苦しみが何なのか

苦しみが何に由来するのかと、やる瀬なく吟誦し

エコーの反響する応答で、想い人の名を受けるが嬉しくて

そのことで心内に宿る恐ろしき苦痛を楽にしたいと望む

者。

その者の心内に宿る恐ろしき苦痛を楽にしてくれるのは
木々が笛の音に合わせて踊り、急流が楽の音に足止めて
エコーが不動のまま彼らに恋の歌を歌い始める時。
だから教えて、牧人の仕事をしてどんな利益があるのか
を。

（身分いかに卑しくとも、愛神は恋の矢を授けてくれるか
ら

いかな隠れ家とて身に抱える傷から逃げるのに役立たない

から

上辺の悦びは朽ち果てた魂のたどたどしい救援にしかなら

ないから）

利益とは、日々どんな炎に体を焼かれるのか見分けるだけ

のこと。

遥かに幸いかな、御麗人は。身分が高くて自由に近寄れ

天性のお美しい体の作りに、誰彼問わず皆の眼は惚れ惚れ

するばかり。

勇気も備えられ、世の人々にその勇気の証しを残されまし

た。¹⁸

勇気は美と豊かさに飾られれば快いもの。

露ほども疑わないで、時が御麗人の思いの丈を語ってくれ

ましよう。

技を傾注して火を隠そうとしたところで、それはまず出来

ない相談。

胸の炎が鎮まらないことを願う心にあつては

自然が一寸助けて働けば、それを表わすに十分。

それゆえに詩神に大いなる称賛を与えたまえ。詩神に瓜二

つの似姿で

御麗人は心底から摘みたいと願うその果実に近づいておられる。

「クレオフィラ」そもそも肥沃な土地が善き種子を増やす

ことを止め

そもそも川が滔々たる流れを大洋に返報するのを止め

18 ビュロクレスの勇ましい英雄的な行動は、『ニュー』第一巻五、六七章で詳細に語られている。

そもそも信頼できるグレイハウンド獵犬が虎に変貌し

そもそも美德が悪徳、美が染みと見なされることになれば

その前に、賛歌を歌ってあの御方を莊嚴に誉め称えるのを

捨てます。

あの御方への賛美こそ、巷に溢れる称賛の唯一の起源。

だが、人は誰しも自らの事情にこそこの上なく聡いもの。

自ら傷を痛感せねば、誰も傷の痛みを巧みに語れない。¹⁹

私の身分が偉大に見えようと、あなたの境遇こそ恵まれて

いると映る。

とはいえ、二人ながら自らが偉大とも恵まれているとも考

えない。

（嗚呼、しかと考えて）偉大さは更なる偉大さと比べれば

偉大ではない。

高々と聳えるオリユンポス山を前にして小山にどんな評価

が下せますか。

こんなちつぽけな偉大さは最高の偉大さと比べればそうと

19 ロミオの「恋の痛みを感じたことのない奴が他人の傷をあざ笑うの」だ（『ロミオとジュリエット』二幕二場一行）を参照。

しか思えない。

ヒマラヤ杉が一匹の蟻の重みに気圧されて大地に倒れると

き

高価なルビーの正価が胡桃の値段と同じになるとき

太陽の驚異に一本の蠟燭の小さな火花が等しいと思われる

ときには

聳え立つヒマラヤ杉、高価なルビー、輝く唯一の太陽であ

るあの御方に

私の力徳、豊かさ、美しさとして偉大だと評価していただけ

ようが。

いえ、違うわ、勇敢な羊飼さん、人の価値を称号で計るな

ど出来ないわ。

実例がいみじくも教えるように、こうして比べると、そん

な価値は無価値。

操り人形などに騙されてはなりません。王冠を被ろうと王

様を

容赦のない頭痛から救えぬし、金の靴を履こうと痛風は治

らない。

豪華な臥し所が熱病で揺さぶられるのはしばしばあるこ

と。

体の悪疫が衣裳の装飾で隠せないなら

こんなちやちな朝露が恋の火の熱和らげる薬となれましょ

うか。

「ドロス」おお、人間のきらびやかな禍事よ、これが運命

に

あやされる方々の宿命ならば、王国に宿る安らぎは誠我心

もとない。

何の不思議があるう、王子が牧人に姿を変えようと。

大理石の四阿、しばしば心痛の艶やかな憩いの場から

脆くとも、悲しみにはずっと強い粗末な丸木小屋へ来よう

と。

貴女様のお言葉に、世にも名高き御麗人、今は安らぎが私

の魂に

集まっています。分かる、分かりますとも、私の暮らしに

どんな祝福が訪れているのか、そんな痛ましい苦悶の

豊かな泥沼から(それは常に高い位に付きまとうが)
宿命が私を遠ざけるから。高い身分が徳と合体し

美に装飾されても、この悲嘆を絶つ手段にならないなら
その助力を得ても、恋の高みへ登れず

恋にそのような衣裳を纏つても、心から聞く耳を得られな

いなら

真実、私は考えます、悲しみの苦悶に浸かるのは私人の身

分で

よかつたと、宮殿の虚飾に縛られて

心の疾患を育むくらいなら。それは吐き出されるはけ口が

なく

仲間と共に己れ自身から取り出された恐怖の

苦汁の一切を黙つて無理やり、やり過ぎすしかない。

私の生き方はまだまだ、恋の想いで隷従の生活へ

首を突っ込んでしまおうと、叫び声の助力を得て

(壊滅的な恋心に圧迫された)情熱の重荷を軽くできるか

ら。

宮人の嘆き、囁き声に制約されず

時には森へ、時には天へ向かい、誰に聞かれず、気に留め
られず

大胆な雄叫び上げて、私が求め、悩み苦しむものを言葉で

描写できる。

大地の美しいお仕着せを纏う木々に出会えば

安らぎを覚える(病に全身取り付かれた者に訪れるような

安らぎを)

木々に私の境遇の一部が表されていると分かるから。²⁰

月桂樹、我が求めしものを表わし、ミルラ表すはその求め

方。

オリヴ、征服によりて憧れやまぬ平和の絵姿。

銀梅花、我が求愛を成し、求愛戴くは柳の王冠。

糸杉、援助を約束、慰め訪れぬ所での援助を。

甘美な柏楨は語る、私は燃えているが、甘美な火で燃えて

いると。

²⁰ 樹木のカタログ形式はギリシャ・ローマの古典詩人に由来する伝統的な詩の技法。ここでは、「月桂樹」は「勝利」、「ミルラ」は「悲嘆」、「オリヴ」は「平静」、「銀梅花」は「恋心」、「柳」は「拒絶」、「糸杉」は「死」を表わす。

櫟は私に惚ばせる、あの少年がどんな弓を持つのかと。それは音も立てずに強く飛び、無傷のまままで致命傷を与える。

椈の巨木、小高い丘に根を張り、緑一色だが不毛の椈の

木

常に清新、所映え得ながら、実を結ばぬ我が気高き想いのごとし。

世にも芳ばしい実をつける無花果、その蔭は危険が一杯。

同様に、あの御方の天性は世にも甘い、近付けば危険は

更に大きい。

だが、棕櫚が重荷の下で喘ぎつつ聳え立つのを眼にする

と

出来ないものか、悲嘆がどんなに重苦しくとも、立ち上が

ることが。

松は船の帆柱、我が船の帆柱として希望は役に立つだろう

か。

松は高く、希望も高い。松の葉は鋭いが、我が希望の蕾は

一層鋭くあれ。

蔓の巻き付く楡の木は、抱き締めたいとの想いを蘇らせる。

白楊の色は日の出から日の入りまで変わり続ける。

同様に、我が太陽に屈し、あの御方の光に応じて私は表情

を衣替える。

樹齢重ねた楡の老木、切り倒されて建材として役立つ。

我が宿願、恐怖で絶たれて、あの御方の名誉を作る骨組と

ならん。

トネリコは槍となり楯の抵抗を受ける。あの御方の力は抵

抗を受け付けぬ。

棕櫚は雌雄が合体し、和合を芯から喜ぶけれど

感覚あるものは無感覚となって、感覚に抗うものなのか。

このように想いは追い散らされても、想いは想いを更に育

む。

このように木々も他の物も、恋の書物となる。

だが、森の女王、ヒマラヤ杉²¹を涙に濡れた眼で見上げると
き

私の中に君臨するあの御方の姿形を心に描きつつ

あの御方が杉の中に住まいて私が発する嘆きの声を聞いて

下さると考える。

杉の気高い頭^{こゝろ}が頷くと、あの御方が私に会釈して下さると

信じ

杉が風に騒ぐと、あの御方が答えて下さると思う。

その時は大地に跪き、こんな風にその影絵に話しかけるこ

と度々。

「一粒の真珠、おお、掛け替えない真珠、人の心が御座

となり

不朽の名声が従僕となるに相応しい唯一人の御方様

しばしの間、この偉大な高座から降りられて私を御覧下さ

い。

21 バメラ姫は一貫して堂々たる樹木に結び付けられる。『オールド』第三巻には、バメラ姫とドロスが松の木の樹皮にそれぞれ歌を刻み込む場面がある。

他の者は御覧下さるな（他に見る価値のある者は御座いませぬ）。

ただ、あなたが作り出された作品は例外。私のこんな変貌

は

あなたが為された事ゆえに、御自分が作られた作品を蔑ま

ないで下さい。

粗末な洞窟によく宝物が隠され、粗末な宿屋に王様もお出

ましになる。

険悪な雲の奥には、綺麗な星々が実にしばしば潜み隠れて

いるもの。

「クレオフィラ」勇ましい羊飼さん、あなたの真価がそう

ならば、その方は

それを洞察しふさわしく報いて下さいましょう。あなたの

運が羨ましい。

だけど私は、悲しみを癒すためどんな願いを立てることが

出来ましょう。

自然は援助を差し延べる手段から私を阻んでいるようだし

何かの出口が見つからうと、運命がその逃げ道を固く閉ざしてしまふ。

こんなに疫病神に祟られて、どうして傷を治す望みを算段出来ましよう。

何か脱出口の光をどこから私の心に示したらよいのでしよう。

縛られて、解かれるのが嫌なほど気高い縄で縛られて

私は自分の看守、他ならぬ己れの牢獄にして囚人。

だけれど、私の希望はこのように置かれ、ここに慰めはし

つかりと根付く。

叡知が確かな座を占めるあの愛しいダイヤモンド、

その力は私を変貌、いや、改作するほどに強力（たつよき）だけれど

やがてはこの炎があの方の光線で燃え上がったと気づかれ

て

私の中でこんなに奇妙に膿み爛れた傷を哀れと思し召し下

さるでしよう。

そうなればいいのに。そんな結果を叶えたまえ、神々よ、

首尾よい結果を。

間違いない犠牲として、私の心の供物を日々供えます。

心の中では、想いが神殿、視線が祭壇。

だけど止めましよう、立派な羊飼さん。物悲しい歌声で聴

衆の皆様を

退屈させるのは止めにしましよう。目当ての方々が私たち

の真意を

正しく汲んで下されば、悲しい胸の内は充分にさらけ出し

たし

五感には悲哀からしばしの休息が必要です。

三〇 フランガスとブローンの問答歌²²

22 この対話詩は、『オールド』の中で最も精巧な副筋、羊飼のヒストリーが「第一歌集」で語り出す、エローナ姫とフランガスの物語に繋がる。リユキア国の王女エローナ姫は愛神を軽蔑し、国中のキュービッドの絵と像をすり消させ、破壊させる。キュービッドはこの冒瀆的な行為への仕返しに、彼女を賤しい生まれのアンティフィロスに激しく恋させる。姫は周囲の猛反対を押し切つて彼と結婚するが、それが原因で一連の悲劇的な事件が起きる。「ニュー」第二巻の最も重要なエピソードだが、未完に終わった「ニュー」では、事件は決着を見ないままである。フランガスはイベリア国の嫡男で王位継承者として人望があったが、若い時分の火遊びがもとで、やがて父王に疎まれ廢嫡され、祖国を追われて苦境に陥る。血縁の

「プランガス」ああこの巡礼の旅は 一体いつまで続く！

次はいかに過酷な苦難を降らせるのか 神々は準備万端
過去の嘆きに これから受ける苦しみを上乗せすべく。

久しく 声はかすれ 喉は痛みを覚えん

これぞ 空に向かって叫び 地に呪いを吐いた見返り

だが嘆けば嘆くほど 悲しみは一層心に染みん。

ああ、何処で かの非情な技は生み出されり

土塊つちくれで魂を受ける器かたどを模る技は。されどその器は

いずれ自ら朽ちて行く運命にあり。

何ゆえぞ かくも崇高な魂が 薄暗い棲家を要するは。

肉で身を包み 魂はここで何を求めん

何もなし 哀れな人間という輝かしき名の他は。

テイリダテス王とアルタクシア女王の宮廷に身を寄せるが、宿命によって、捕虜として監禁されたエローナ姫を愛してしまい、姫を解放するために二人の王子の行方を捜している。『オールド』第二牧歌集では、アルカディアを通りかかった彼は、賢明な羊飼ブロンに出会い、二人の対話詩が始まるが、その模様は別の羊飼ヒストールによって報告される（「ニュー」での対話者はバシリオスに変更されている）。因みに、後にこのプロットはポーモントとフレッチャー合作の芝居『愛神の復讐』（二六一年）で利用されている。

星々の弄ぶ球 運命の女神に仕える奴隷にすぎぬ。

本当の自分から遠ざけられ 肉体という檻に汚染されて
死は恐れられ 苦痛が人生の支えとなりぬ

汚れた舞台を埋め尽くす役者に似て。

ころころ変わる気紛れを 間抜けが間抜けに見せておる

猛威を振るう悲哀を除けば すべてが冗談だとして

子供はただ感じるだけが 大人は切に思い知る

人生への胸騒ぎから 人は叫び声を上げて生まれけり

知恵が付くだけ悲しみを 真から味わうことになる。

恥辱の並ぶ店 夥しい染みで染まった書物なり

この肉体 そう この肉体は

その中に骨肉の争いをはぐくむように創られり

この貧相な作品のなかでは四大が

バラバラに置かれていて

まとまるようには出来てないのだ 安定した状態には。

この惨めな状態を教えてくれるのは悲しみだけで

（まさに鞭で打たれて跳ね回る駒の如くなり）

この人間とは 物言う野獣 歩く木で

悲しみこそは 最良の判断を示す試金石なり

悲しみを知らぬものではでくの坊

どんな大義も人生から悲しみの原因を取り除けぬなり。

「ブロン」全くいつまで乱すのか 其方の嘆きの調べを

もちて

うらかな野辺の織り成す朗らかな音色を、
凡ゆる幸運が維持する完全の住処にて。

「プランガス」呪われよ幸運 呪われよ 幸運に希望を

築く者 凡ゆる憂き目に遭いながら 絶望が

最も堅固な楯とならぬ者に呪いを

我見えし エローナ姫の煌く髪が

両の手で引きちぎられ 雪の如く真白なその手も

純潔の血を流し 自らを引き裂くその様が。

我見えし 美の品々が溢れ出す姫の乳房も

溜め息で膨れ 心労で蒼ざめり

かの眼双子の太陽が注ぐ涙の驟雨も。

我聞きしは 姫の嘆きの言葉なり

(その言葉 糖蜜漬けで 甘く馨しい息で仕上がりぬ)

かつてそれ程苦しんだ想い 今和らげるなど出来ぬこと

否 否 絶望が我が日々の訓諭を語りぬ

斯くのごと たとえ我 人生より逃げようと

プランガスは生き 姫の死に目に遭わねばならぬ。

プランガスは生きねばならぬ 姫のお役に立ちたいと

絶望にうち拉がれても努力する 愛神が我に強いるよ

プランガスは生き エローナ姫は死なせるのかと。

エローナ姫の死? (もしも神が在ますならば) ああ神よ

天を巡る星々も これ程力無きものなからむ

夜空に輝くその目でさえ こんな恥辱の見守り役よ

のろまを急がせ 美しき祭壇を幾つも築かむ

いと高き神々へ 天にて怠惰に鎮座在まし

千辛万苦のこの時に 美德を無視する神々に捧げ奉ら

む。

「ブロン」ああ君よ 君が如何に神々を駆り立てるか気

に留められたし

己が抗えない当然の怒りへと駆り立てるのだ。

不敬な言葉は語り手がうぬぼれているという証

ああ 我らが自己愛の深い霧に

包まれている間（激情はそのように人を欺く）

神々が大いに助けし時 傷つけられたと思うのだ。

我ら虫けらを傷つけんと 裁きの神は捨てるというのか

彼の本質を？彼自身を？正しく裁くのが彼の本質なるに

我らが敗北から 神は如何なる栄光を授かるのか？

だが眩んだ眼では 前途が見えずに

神の振う甘美な鞭を 我らは愚痴る

至福へと 打って教える優しき道とは気付きもせずに。

姫が死にゆく定めなら その時姫はやつと終える

禍々しき人生を。失くしたとて何故に哀しい

その惨めさを 巧みに描くが 汝である。

これが人 内なる嵐が荒れ狂い

意志の波間で 逆巻く風が乱れ舞う

失くして嘆く 持つて嘆いたその憂い。

「プランガス」姫が死ぬ？ 残酷な炎が消してしまおう？

姫の瞳の輝きを 斯くも数多の心に火をつけしに

死神さえも愛にて殺めうる力 姫なら持たぬはずなから

う？

否 冷血な死神でさえ 火をつけし 己が熱き欲望に

姫を楽しまんと（歎喜自体 姫の言いなり）

大地から最も豪華な衣を剥ぎ取りに

かく死神は 我らすべての恋敵となり

汚れた胸で 姫を抱かんと望みて

墮落の内に 美德の宮が落ちる定めとなり。

ああ脆き美德よ 決して朽ちてはならぬ汝が戦利品の上に

て

死神に勝利を築かせてはならぬ

死神の息の根をまず止めよ 汝がやつと天敵となりて

いかなる食でも かの太陽 姫の顔は曇らせぬ

いかなる地雷も この麗しき塔は倒せぬぞ

いかなる冒瀟も これ程の聖女は汚せぬ

世界が庭なら 姫は名花ぞ。

庭中を甘い香で満たす また姫は類い稀な

貴賓にて 天地が共に姫の館ぞ。

このすべて（ああ） 灰に埋めて捨て去るとな？

悲しいが もし不死鳥を新たに陽で焼くつもりならば

姫がまず 寝屋を建てねばなるまいな

だが承知の如く 救うであろう心優しき太陽ならば

これほど己に似た光 かの力さえ持つやも知れぬて

太陽に バエトンの母の哀願呼び覚ますなれば

それ故に 汝は卑しきヴァルカンの恨みの炎を使いて

23 太陽神とオケアノスの娘クリュメネの息子。母に育てられ、長じて父が誰であるか教えられると、太陽神の館を訪れ、洪る父を説得して太陽の馬車を操縦する役目を一日だけ父に代わって勤める許可を得た。しかし父が危惧したとおり、馬車を曳く馬たちを御することが出来ず、暴走させ、世界を火災に陥れたためにゼウスによって雷電で打たれ、エリダノス川に墜死した。彼の死を嘆いた姉妹のヘリアデスたちは、川岸でポブラの木に変貌し、その涙は琥珀になったという。

24 ローマ神話のウルカヌス、火と鍛冶仕事の神、ギリシア神話ではヘファエストス。天の主神ゼウスとヘラの嫡男であるが、幼い頃夫婦喧嘩を止めに入ってゼウスに間違つて天から突き落とされ足が不自由になった。その代償として美と愛の女神アフロディテ（ヴィーナス）を妻に迎えるが、妻は夫を嫌って戦の神マルスその他と浮気ばかりしている。その報復に、決して破れない網で同衾中のマルスと妻とを捕まえ、神々の見世物とした。

何ものをも容赦せぬ火 あの出女蠟をも溶かす

溶ける間も 全アジアを灯す光となりて

ああマルス 汝が振う大鉞は一体何を打ち倒す

寝取られ野獣のヴァルカンに むぎむぎ姫を溶かさせる

なら

汝が愛しきヴィーナスの子で 美はヴィーナスをも凌駕

す

ああヴィーナス（娘への賞賛も 汝が高貴な心なら

何の嫉妬も生まぬ筈） 汝が夫ヴァルカンに姫のことをと

りなし給えよ

甘美な言葉は 下劣な心をしばしば改めるものだから

ああ我が眼 そはかつて姫がその顔を映せしところよ

（姫の顔 我が心になお鮮やかに生さるに）

ああ頭脳よ 姫への想いのみ宿れるところよ

ああ我が手 別れ行くとき姫のその手に触れしに

ああ唇よ 我が涙の雫に濡れし姫の手に触れなむ

ああ舌よ その折は黙し 敢えて心の傷を語らぬに

ああ魂よ 姫への愛のみに使い果たされむ

汝等がかつて見 想い 触れ 口づけ 語り 愛したも
のを

すべてを姫に 姫に向けて捧げまつらむ

「ブロン」そなたの嘆きの言葉いたく我が魂を揺さぶら

ん

そして我が意志とはうらはらに

悲しみの力を心に深く突き刺せしこと我認めん思うに、

我そなたの熱情を共有するがために

そなたの窮乏という鏡に映し出されしは我身の無力なり

自責の念を感じる者は憐憫の情につき動かされやすきゆ

えに

されど理性はかく語り 理性は俗事をやすやすと

出入りさせて しかるべき釣り合いを

保つ力を持ってり

ところが欲望という暴君が無理じいして

最大の悦びを用意させるも

我らが割前は、仮の休憩場に過ぎぬにて。²⁵
我ら完膚なきまで高潔に欠けるといへども

この子供じみた余計事を手なづけんと望まんや

瞬きするなかれ、曇りなき視力に欠けていようととも

偏屈な不調和を生み出す者はあらんや

女々しき嘆きに屈服する男ほどに

さらに調和のとれた文法の教えを、いざ学ばんや

「ブランガス」もし我が耳を突き抜ける 聴き訓諭 甘美

な音色とて

あるいは詩人の物語りさえ 僅かな慰安にならぬなら

もしおぞましき絶叫を 我らが幾らか止めようとて

かたや 我が魂なる御方 姫が苦難に生きるなら

我が命 長く大地にとどめ給えよ

25 この描写は、「オールド」の冒頭近くで、「多くの人々に憑依する虚栄心、人生というこの哀れな仮住まいの休息所を永久の館にせんとて、将来やって来ることを確実に知りたいたいと願う虚栄心」に唆されてデルファイの託宣に伺いを立てるパシリオス公の人物像を暗示し、彼の万事にわたる愚かしさも相俟って、「ニュー」では対話者が賢者ブロンからパシリオスに変更されているのは、合点が行かないと思われる。

悲惨なる我には　それが最後で最悪なる呪いだから
 姫の聖なる品々を一度識れば　隔てられぬよ

歓喜から　また運命が姫を卑劣に追放したと知ったので
 道を説いても　憤怒の苦悩をおさめられぬよ

忘れえぬ　奴等が牢に姫を閉じ込めたので
 遺恨と当然の侮蔑で胸を膨らすに

姫は死への床に臥す　私がその紐を解き姫を楽にする日
 まで

忘れえぬ　あまりに大きな嘆きの苦痛に

ダイヤモンドで　硝子に刻む姫の言葉は

「エローナ死して　終わりを告げぬ醜き苦悩に」
 忘れえぬ　姫の申されし奇妙な言葉は

今すぐ妾に火責め　水責め　縛り首をと望まれし
 まるで死が唯一救いの道と言いたげな様は

ならばまた　彼我の区別を忘れ去りたし
 プランガスと呼ばれることを　忘れられたら

また　我が母の子であることを忘れ去りたし
 だがもしも　我が追憶がかく奴隷となる運命なら

五感すべてを征服せし　かの不思議なる一撃の
 常に安ずるこの想い　震えず安らかにおれるやら

「ブロン」絶え間なく己自身を攻め立てるもの

如何なる赦しも効き目なし　また自らすすみて
 己自身を傷つけるなら　如何なる盾も通用せぬもの

哀れな男に災いあれ　個々の皮相　様々な事に煩いて
 しかして心は満つることなく

内なる悲嘆を山となし　散々己を破壊して

かく我がが想い　苦勞しても薊あざみのために鋤かれるごとく

かく最も高貴な部分さえ　心痛のあまり枯れ果てる
 かく精神は　あまりに大きな憂いに散りゆく

一日は　明日のために悲嘆の因を積み上げる
 幸運により　悲嘆に備えぬままに済んだ者として

友情から　悔やみの種を借りて泣きぬる
 善と　善の影とに引き裂かれて

単なる脆さを　我らは憐憫と見做すに
 かく我ら　至高の創造から滑り落とされて

だがプランガス殿 私があなたの病を誤診せぬように

また擦って傷を酷くせぬよう ここで歌を止めたい

ろばは キスがしたくて 却って傷を負わせたに²⁶

各詩の吟誦者あるいは作者の名前一覧

アゲラストス Agelastus 「笑わない」 七〇番、七六番

アレテス Aethes 「誠実な」 三番

アルカディアの羊飼たち Arcadian shepherds 六番、二七番

アリストメネス Aristomenes 四四番、六八番（ムシドロスの作）

バシリオス Basilus 「王、支配者」 一五番、二六番、三八番、

五二番、五五番、五九番、六九番

ボーロン Boulon 「忠告」 三〇番（プランガスと。ヒストールの報告）

カリタ Charita 「優美」 四五番（ムシドロスの作）

クレオフィラ Cleopatra (Philoctea) の綴りかえ。ピュロクレスの偽名)

ダメタス Dametas 五番、二五番、四六番（ムシドロスの作）

デルファイの託宣 Delphic Oracle 一番

ディコス Dicus 「権利、慣習」 八番、二八番（ムシドロスと）

ドロス Dorus （ムシドロスの偽名）

ゲロン Geron 「老人」 九番（ワイリシデスと）、一〇番（マステイクスと）、六七番（ヒストールと）

ギネキア Gynecial 「女性らしさ」 一二番、四〇番、四一番、四三番、

五四番（五八番＝媚薬の標語）

ヒストール Histor 「歴史」 三〇番（プランガスとボーロンの歌の報告）、六七番（ゲロンと）

26 かり、イソップの寓話で、陽気な犬と張り合おうとして、主人にじゃれか
かり、却って蹴りをくらわしたロバの話に言及している。

クライオス *Klaus* 「泣く」 七一、七二番（両歌ともストレフォ
ント）

ラロス *Latus* 「お喋り屋」 七番（ムシドロスト）

マステイクス *Mastix* 「鞭、仕置き」 一〇番（ゲロンと）

ムシドロス *Musidorus* 「詩神の才」 四番、七番（ラロスと）、

一一番、一三番（ビュロクレスと）、一六番、一七番、二三番、

二八番（デイコスと）、三四番、三五番、三六番、四四番（ア

リストメネスの偽作）、四五番（カリタの偽作）、四六番（ダ

メタスの偽作）、四九番、五〇番（パメラと）、五一番、六八

番（アリストメネスの偽作）、七七番

ニコ *Nico* 「勝利」 二九番（バスと）、六四番

パミラ *Pamela* 「馨しき」 四七番、四八番、五〇番（ムシドロスト）

パス *Pas* 「全体」 二九番（ニコと）、六四番

フィリシデス *Philisides* 「天体、星を愛する者」 *Philip Sidney* の綴

りかえ」 九番（ゲロンと）、二四番、三二番、六二番（ビュ

ロクレスの報告）、六六番、七三番、七四番

フィロクリア *Philoclea* 「栄光を愛する者」 二番、一二番、一三

番（ムシドロスト）、二〇番、二二番、三二番、三三番、

三七番、三九番、五六番、五七番、六二番（フィリシデスを

報告）

プランゴス *Plangus* 「悲嘆」 三〇番（ポーロンと）。ヒストールの

報告）

ピロクレス *Pyrocles* 「火と栄光」 二番、一二番、一三番（ムシ

ドロスト）、一四番、二〇番、二二番、三二番、三三番、
三九番、五六番、五七番、六二番（フィリシデスを報告）

ストレフォン *Stephon* 「もがく」 七一、七二番（両歌ともク

ラスオスト）